

犯罪に関するイメージ調査 — SCIT の質問項目の検討 —¹⁾

軽部 幸浩*

A Study of the Crime Image for SCIT Questions

Yukihiro KARUBE*

The present study aimed to examine the crime's image for SCIT questions. Subjects were 145 (male : 45, female : 100) students of the university. We conducted a collective survey. The results showed that many robbery cases were imagined such as knives, cash, mask and at night. In the robbery cases on the street of a residential area were imagined motorcycles, bags, men, snatch theft and at night. The image of a gun was considered to be influenced by TV dramas and movies. It is necessary to collect and scrutinize more data based on these results.

key words: SCIT, crime images, text mining

問 題

犯罪捜査で活用されているポリグラフ検査とは、生理心理学に基づき構築された心理検査の一つである。この検査の主要な質問方法は、有罪知識検査 (Guilty Knowledge Test : GKT) もしくは、隠匿情報検査 (Concealed Information Test : CIT) と呼ばれる質問方法である。犯人でなければ知り得ない犯罪事実に関する質問 1 項目 (裁決質問) と、それに類似した質問 4~6 項目 (非裁決質問) によって構成された質問表を用いて検査が行なわれる。実際の捜査現場における検査結果は、国内外の実験研究で検討されてきており、検出の成績も高く、日本の公判廷では証拠としての科学的な評価を得ている (小林・吉本・藤原, 2009)。

現在使用されている生理指標は、皮膚電気活動、呼吸運動、心臓血管運動といった自律神経系であり、各質問に対する生理的反応を比較し、判定が行なわれている。また、近年では、背景脳波や事象関連電位といった中枢神経系の指標による検出方法が確立され、その検出率の高さが実験研究で確認されている (桐生, 2017)。しかしながら、生理指標についての研究は散見されているものの、質問項目の作成については、未だ客観的分析に基づく研究がなされていない面がある。CIT は、当該犯罪に直接かかわる内容を持つ質問 (裁決質問) と、それと同様のカテゴリーに属するが当該犯罪とは関わりのない内容を持つ複数の質問 (非裁決質問) を順次呈示する。質問項目は、犯人であれば犯罪事実を弁別できるが、無実の者

であれば両者を弁別できないように構成されている。原理的に、無実の人間が犯行に関わったと判断されることがないように考えられた質問法といえる (高澤, 2009)。

一方で、実務場面では、捜査側つまり質問作成者も未だ把握しておらず、犯人だけが知っている犯罪事実も存在する。そのような犯罪事実を明らかにするために用いられるのが「探索質問法 (Searching CIT : SCIT)」である。SCIT は、広義には CIT に分類される質問法であるが、いわば「裁決項目のない CIT」である。したがって、SCIT を作成する際には、その事件において犯罪事実として可能性が高く違和感のない質問項目を想定して作成している。SCIT の結果、特定の質問項目に他の項目と異なる反応が生じた場合、被検査者は、その項目を犯罪事実として認識していると判定される。どの質問項目にも他と異なる反応が生じない場合は、いくつかの判断が考えられる。ひとつは、被検査者が質問されている犯罪事実をそもそも知らない (あるいは認識していない) という判断である。もうひとつは、犯罪事実として知っている項目はあるが、覚醒水準の低下や無反応者であったなど何らかの理由で反応が生じなかった場合である。さらに考えられるのは、質問項目の選択を誤り、犯罪事実自体が質問系列に含まれていない場合である。後者の 2 つの判断は、犯人であっても無実と判断してしまう偽陰性の可能性がある。特に質問項目の選択については、狭義の CIT (裁決項目のある CIT) と同様、SCIT の場合も、選択基準が必ずしも客観的に定められているわけではない。むしろ、質問作成者は専門機関において一定の期間トレーニングを受けなければ、実務検査を実施することはできない。現在の法的評価も証拠能力を認めているところから、適正に質問項目が選定されているものと考えられる。しかしながら、裁判員裁判において、「なぜその質問項目を選択したのか?」、といった素朴な疑問に対しては、学識経験のみで説明するよりも、明確なデータにて説明することがより適切であると考えられる。そこで、今回は SCIT の質問項目の選択について検討を試みることにした。

方 法

調査期間・調査対象者 2019 年 4 月。大学生 145 名 (男子 : 45 名, 女子 : 100 名, 平均年齢 : 18.3 歳, SD = 0.71)。

質問用紙 重要犯罪のうち認知件数の多い「強盗」において、「強盗事件」と「住宅街の路上で強盗事件」についてイメージできる内容について回答を求めた。なお、「強盗事件」については、「発生時間」、「場所」、「犯行手段」、「被害品」、「犯人像」など、「住宅街の路上で強盗事件」については、「発生時間」、「被害者」、「被害者の状況」、「犯行手段」、「被害品」、「犯人像」など、に関して思いつくまま自由記述させた。

倫理的配慮 調査対象者に対して、調査実施前に調査目的、調査内容を説明し、同意を得られた者のみ調査用紙を回収した。調査は、集団調査法にて実施した。本研究は、著者の所属機関に設置されている倫理審査委員会の承認を得た。

分析方法 分析には、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を使用し、自由記述に対して感性分析法を用いた。カテゴリー作成は、頻度ベースを使用し、出現頻度の下限は 10 回として分析を行った。なお、統計ソフトが自動的に付けた語句名について、分かりやすくするため一部修正を行った。

¹⁾ 本研究は、日本応用心理学会第 86 回大会で発表された。

* 日本体育大学体育学部

Faculty of Sport Science, Nippon Sport Science University, 7-1-1 Fukasawa Setagaya-ku, Tokyo 158-8508, Japan.

Table 1 回答の内容

強盗事件	住宅街の路上で強盗事件
発生時間	
夜 (33.9%), 昼 (30.5%), 深夜 (23.7%)	夜 (53.4%), 昼間 (16.5%), 夜中 (13.6%)
犯行手段	
銃 (20.3%), ナイフ (17.2%), 刃物 (16.4%), 包丁 (10.9%)	ひったくり (34.0%), バイク (18.2%)
被害品	
現金 (62.4%)	バッグ (27.5%), 鞆 (17.4%), 財布 (13.0%), お金 (10.1%), 現金 (10.1%)
犯人像	
黒い色 (15.3%), マスク (12.5%)	男性 (64.3%)

() 内は出現率

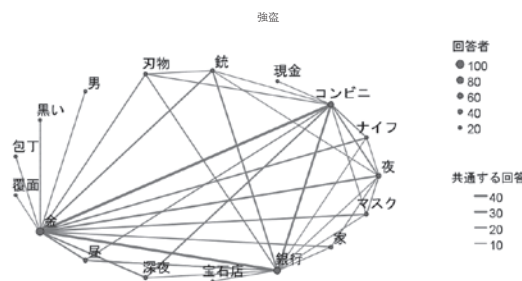


Figure 1 強盗事件

結果と考察

「強盗事件」と「住宅街の路上で強盗事件」について、調査対象者より得られた回答についてそれぞれ頻度を求めた。Table 1 は、「強盗事件」と「住宅街の路上で強盗事件」で尋ねた内容ごとに、2つに共通する項目において出現頻度 (10% 以上) の高かった回答内容をまとめたものである。

表 1 以外の回答内容については、強盗事件の「場所」は、「銀行 (37.9%)」、「コンビニ (29.1%)」、「家 (13.8%)」が多かった。また、「住宅街の路上で強盗事件」の「被害者」は、「女性 (54.4%)」、「年寄り (10.4%)」が多く、「被害者の状況」については、「帰宅途中 (18.2%)」が多かった。ところで、強盗事件の犯行手段に関しては、「銃」という回答が多かった。このことは、ドラマや映画などの影響が多分にイメージとして強く出ていたのではないかと考えられる。

Figure 1 は、テキストマイニングを行ない、共通する回答が 7 よりも多い単語についてサークルレイアウトを求めたものである。この結果から、強盗事件においては、「金」、「昼」、「深夜」、「銀行」、「家」、「マスク」、「夜」、「ナイフ」、「コンビ

路上の強盗

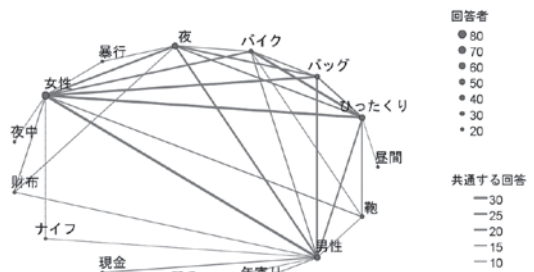


Figure 2 住宅街の路上で強盗事件

ニ」、「銃」、「刃物」の単語にそれぞれ共通する回答が多くみられた。特に「銀行」、「コンビニ」、被害品に相当するものとしては「金」が共通する回答として多く、強盗事件において、想起されるイメージは、「銀行」、「コンビニ」、「金」と考えられた。

住宅街の路上で強盗事件の場合は、「夜」、「暴行」、「女性」、「財布」、「ナイフ」、「男性」、「鞆」、「ひったくり」、「バッグ」、「バイク」などの単語にそれぞれ共通する回答がみられた (Figure 2)。

特に「ひったくり」、「バイク」、「夜」、「女性」が共通する回答として多く、住宅街の路上で強盗事件において、想起されるイメージは、「ひったくり」、その犯行手段は「バイク」、発生時間は「夜」、被害者は「女性」と考えられた。

本研究では、「強盗事件」と「住宅街の路上で強盗事件」において、イメージされやすいいくつかの項目が示された。こうしたイメージされやすい項目を SCIT の質問項目に使用した場合、そのことが生理反応に影響し、誤判定へと導く恐れがあると考えられる。そのため、質問項目として使用する際には、単語のイメージのされやすさを考慮して、質問項目を慎重に取捨選択し、単語の意味を被検査者に十分説明することが重要であると考えられる。

呈示するいくつかの質問項目で特定の項目に反応が認められた無実の人が、犯罪事実として「想像できた」から反応が出たという可能性が少なくなるように、この点を担保するため各項目の想像可能性を同じ程度にする必要があると考えられる。将来的には、事件ごとにイメージされやすい項目をデータ化し、質問作成において注意を要する項目を予め把握することにより、適正な質問作成の資料となる可能性が考えられる。

引用文献

小林孝寛・吉本かおり・藤原修治 2009 実務ポリグラフの現状 生理心理学と精神生理学, 27 (1), 5-15.
 桐生正幸 2017 日本におけるポリグラフ検査の変遷 — 犯罪事実の記憶、隠蔽の意図— 行動科学, 56 (1), 31-42.
 高澤則美 2009 ポリグラフ検査 — 日本における検査実務と研究の動向— 生理心理学と精神生理学, 27 (1), 1-4.

(受稿：2020.4.27; 受理：2021.1.28)